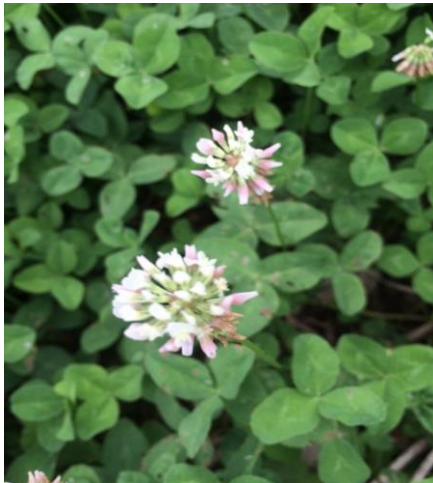


夏の調査（その2）を行いました

昆虫の調査を2015年9月5日に、植物の調査を7月29日に行いました。観察した生き物を紹介します。

< 植物コーナー >



シロツメクサ

荒れ地に花を咲かせる戦略

調査の日、ちょうどシロツメクサが咲いていました。シロツメクサは別名の「クローバー」の方がよく知られているかもしれませんが、ヨーロッパ原産の外来種で、明治以降、家畜のエサ用に輸入されたものが各地に逃げ出して帰化しました。この植物の根には、根粒菌が共生しています。根粒菌は、空気中に大量に存在する窒素を取り込み、植物に供給しています。その代わりに、植物が光合成でつくった栄養をおすそ分けしてもらっています。

荒れ地の土壌には窒素分が貧弱なため、植物が生育するには過酷な環境ですが、シロツメクサこの根粒菌のおかげで、荒れ地でも効率的に繁殖し、



シロツメクサを採集しています



地下で縦横無尽に伸びたランナー（ほふく茎）

花を咲かせることができるのです。

さらに、シロツメクサを抜こうとすると、抵抗が強くなかなか抜けないといった経験はありませんか？シロツメクサを採集すると、土上にランナー（ほふく茎）が縦横無尽に伸びているのがわかります。このランナーの各所から根がしっかり張っていて、土壌をしっかりとネットを張るように抑えることができます。そのため、土留めなどでも使われることがあり、この外来種が各地に広がる一因ともなりました。

現在では、日本の風景の一部になっているシロツメクサなどの外来種は白屋でも景観を構成する重要な構成種になっていますが、原風景を考える上で、一考する必要があるようです。

< 昆虫コーナー >

旅をする虫たち

虫たちの中にも旅をするものがあります。夏の終わりの調査では、アキアカネやイチモンジセセリといったなじみ深い昆虫が観察できました。これらの仲間は旅をする昆虫としても知られています。



アキアカネ♀

「赤とんぼ」として知られているものの代表的な種です。初夏に平地の田んぼや池などの周りで羽化して成虫になります。涼しい高原や高い山で過ごして、秋になるとまた平地に戻ってきて、産卵します。

最近では、水田の農薬の影響で激減していることが報告されています。



イチモンジセセリ

成虫は6-8月に発生します。幼虫はイネ科やカヤツリグサ科の草を食べるので、イネの害虫とされます。

秋になると群れになって南の方角に渡っていくことが知られています。同じように「渡り」をするアサギマダラほどは、どこに渡っていくのかよくわかっていないようです。



ネキトンボ

奈良県希少種のネキトンボを発見！

ネキトンボは成虫で、体長38-48mm、腹長23-30mm、後翅長29-39mmのやや大型で太めの赤とんぼです。

奈良県レッドデータブックでは、希少種にリストされています。樹木の発達したアシ、ガマなどの挺水植物が岸边にたくさんあるような湖沼などに生育しますが、植生遷移や湖沼の改修などで減少傾向が懸念されています。



オオスカシバ

ハチにまちがわれるガ

オオスカシバはしばしばハチにまちがわれています。人によってはびっくりしてにげてしまうのもよく見かけます。ガですが、昼に勢いよく飛んでくるのでびっくりするのでしょうか。ガなので、成虫が人を刺したりすることはなく、お花の蜜を吸っています。